



先生、なんで見捨てたん

3月×日

今日は進級判定会議の日だ。わずか数時間の会議で、わたしと子どもたちの1年間が「評価」される。逆に言うなら、その「評価」に耐える1年だったかどうか、それこそが問われる日でもある。

会議の資料を見る瞬間は、毎年のことながらドキドキしてしまう。「ヤツは進級できたかな?」。気になる生徒の名前をつい探してしまう。

さあ、今年はどうだろう…。

* * *

担任時代、わたしが一番嫌いだった書類は、「退学届け」でした。退学届けに添えて出す「指導の経過」を、どうしても書くことができませんでした。1年間の膨大なつきあいを、たった数枚の紙に書けるわけがないからです。そして、「終わってしまったこと」を振り返って書く作業は、わたしには「敗戦処理」としか考えられませんでした。その書類を書くのがイヤという、ただそれだけの理由で、生徒たちには「絶対にみんなで進級しような。卒業しような」と言い続けてきました。

今振り返ると、わたしに「教員とは何か」ということを教えてくれたのは、はじめて担任した3年生のクラスにいたSという生徒です。

そのクラスには「問題児」とされる子がたくさんいました。そんな子どもたちに、なんとか学校に向いてほしい、なんとか卒業してほしいという思いから、遠足、文化祭、同和学習など、さまざまなものづくりをしました。

そんなクラスの中のひとりだったSは、いわゆる「高3デビュー」の子でした。高校3年生の時に滋賀県の暴走族のアタマとつきあいだしたSは、突然爆発します。高校見学に来た中学生を見て、「あいつ、わたしにガンを飛ばした! しばいだる」とすぐSに、まわりの友だちも「中学生相手になに言うてんの、恥ずかしいからやめ」とあきれ顔です。もちろん、頭髪・服装・態度などを注意する教員への返事は「うるさい! ほっと

け!」です。そんな状況で、まともな成績がとれるはずがありません。「なんとかしてやろう」という教員がいるにはいるのですが、やはり返事は「うるさい! ほっとけ!」でした。そんなSの態度は、担任であるわたしに対しても同じでした。疲れ果ててしまったわたしは、「あいつが『ほっとけ』と言うんやし、ほんまにほっといてやろう」と思い、一切サポートをしませんでした。

やがて卒業判定会議の日、予想通りSは卒業単位に1単位足りず、「卒業不可」という結論になりました。その夜、判定会議の結果を伝えに、Sの家に行きました。「卒業できなかった」ということを伝えた瞬間、Sは泣き崩れました。そして、ボロボロ泣きながら「先生、なんでわたしを見捨てたん」と、何度も繰り返しました。

それから半月ほどたった卒業式の夜、担任団の呑み会で、わたしは荒れました。「あいつが『ほっとけ』と言ったからほっといた。でも、それは間違いやったんや。オレはなんちゅうことをしてしもうたんや!」。仲間の担任たちは「しゃーない。あいつは誰が担任しても無理やったんや」と慰めてくれました。でも、それはわたしにとってはなんの慰めにもなりませんでした。

あの日以来、「あの涙だけは見たたくない。あんな思いだけは絶対したくない」と、いつも思っています。

生徒から「うるさい! ほっとけ!」と1年間言われながら、それでもさまざまなものづくりをするしんどさに比べたら、もしかしたら退学届けを書くほうが「楽」かもしれません。でも、「とりくみ」には未来があります。

わたしの尊敬するある先輩教員は「人間が後悔するのは、やったことではなく、やらなかつたことである」と言います。あの後悔を二度としないために、ほんの小さな「できること」を、少しづつ積み重ねていきたいなあと思ったひとときでした。
(土肥いつき 高校教員)